

水稻育苗について【準備から苗づくりまでの注意点】

【育苗箱・資材の消毒】

一度使用した事のある育苗箱やシート、ビニール等は資材消毒剤の「イチバン」の500～1000倍液または「ケミクロンG」の1000倍液に10分間浸漬して消毒する。ケミクロンGは酸化作用があり、鉄は錆びるので注意する。

【塩水選】

比重の軽い種籾は種子伝染病などに侵されている可能性が高く、発芽も安定しない為、充実した種籾を選ぶために行う。

※水10ℓ当り

区分	うるち	もち
比重	1.14	1.09
食塩	2.25kg	1.32kg
硫安	3.06kg	1.67kg

比重が低いと病気にかった物や未熟な籾が十分に除去されない。

塩水選後の種籾は十分水洗いを行う。

【種子消毒】

種子消毒は浸種前に行い、モミガードC水和剤等の200倍液に24～48時間水洗いせずに行い、処理した種籾は風乾する。

消毒後の籾は水洗いしない。

【浸 種】

種子消毒後の籾に十分吸水させ、揃って発芽させるために水に浸種する。

浸種時間が短かったり、水温が高かったりすると、吸水が不十分となり、発芽勢いの良い籾だけ芽が伸び、催芽が不揃いになりやすい。

十分に吸水した種籾は籾殻が透きとおったアメ色となる。(透かして見ると胚乳が見える。)

浸種はきれいな水道水で行い、河川や池では行わない事。

「ハト胸催芽機」等の商品名でヒーターで温度を保ち、ポンプで水を循環し酸素を供給できる機械も発売されており、種籾にとって良好な状態を確保出来るので推奨される。しかし、特に低温環境で育苗するのでなければ大きめのバケツ容器でも行える。種子消毒の効果を保持する為に、最初の3日程度は水を変えない。その後1～2日毎にゆっくりと水を交換する。籾から溶け出した糖分により水が腐敗しやすくなり酸素も欠乏するのでこれを解消する為である。

水温と浸種日数

水温	浸種日数
10～15℃	7～9日
15～20℃	5～7日

浸種日数は積算温度(温度×日数)で100℃を目安とする。

(低温なら時間が長くなり高温なら短くなる)

20℃を超える水温での浸種は、発芽揃いを悪くするので避ける。

【催 芽】

発芽は30～32℃で、1～2日を目安とする。発芽状態は鳩胸状態とし、発芽率が80%以上となるよう日数を調整する。芽が伸び過ぎると播種時に破損したり、苗の出芽を不揃いにするので、1mmを超えない様に催芽する。

籾を入れる袋が大きいと内部の温度が上がりにくいので袋を分けるか、ゆすったりして湿度差が出ないようにする。

必ず発芽状態を確認してから催芽を終了する。温度を上げると芽の伸びが早いので伸ばし過ぎないように注意。当然のことながら水温を40℃以上に上げると籾が死んでしまうので注意する。